

資料室だより 74

Repertoire International des Source Musicales; B XIV: Les Manuscript du Processional

本科第22期卒業生の寄付金により、上記の書籍を購入させていただきました。
国際音楽史料総覧(通称 RISM)のシリーズから出版された行列聖歌集の写本目録です。

Processional はもともとローマ式ミサで決められた蠟燭の行列(2月2日)、枝の主日、昇天祭の行列のための聖歌を集めた小さな持ち運びのできる聖歌本でした。行列聖歌はミサ聖歌集や聖務日課集のなかにも含まれていることもありましたが、それとは違い Processional は公式な典礼本ではなく歌手たちの個人的な使用のために作られています。事実、写本がそれを使った歌手の名で残っていたりするので。

Processional は最も新しい種類の聖歌本で、9世紀にはこの種の本はありませんでした。それまではミサの楽譜の後ろに楽譜無しで付されていました。別冊本となったプロセスは2通りあります。小さな本に別刷りされたことによって行列のとき持ち運びができるようになります。ほぼ同時に、新しい行列聖歌がどんどん作られ、10世紀、持ち運びのできる聖歌集 Liber processionarius が必要となってきました。

この目録によればおよそ1000にのぼる行列聖歌の写本が現存しています。それらは9つのカテゴリーに分けられています。

- 1) ミサのなかにあらわれた行列聖歌の前例 例えば、Parce Domine など。
- 2) 祈禱のための行列聖歌
- 3) アンティフォナつきの行列聖歌 例えば Hosanna filio David
- 4) 応唱的行列聖歌
- 5) シトー会行列聖歌
- 6) ソールズベリー会の行列聖歌 (1200年以降)
- 7) ドミニコ会行列聖歌 (1254年以降)
- 8) ローマ・フランシスコ会行列聖歌(約1253-1254)
- 9) アウグスチノ会およびプレモントレ会の行列聖歌

いくつかの聖歌は複数のカテゴリーにまたがることも当然あります。

修道会が5つカテゴライズされていますが、インデックスをみると他にもいろいろな修道会がありますが、上記の修道会が典礼に果たした役割が大きいということでしょう。特にドミニコ会は最も多く行列聖歌の写本を残し、全聖歌の14%はドミニコ会起源だといわれます。この目録のドミニコ会の部分をみますと、聖週間の典礼、および聖ドミニコの祝日の典礼は多くの行列があることがわかります。

一方フランシスコ会はマリアの潔めの祝日と枝の主日に限定していますが、実際にはこ

れに聖フランシスコの死去の記念の典礼のための固有聖歌が加わります。例えば **Salve sancte** はマニフィカトのアンティフォナとして聖務日課にあらわれた聖歌ですが、フランシスコ会においてもクララ会においてもこれを行列聖歌として用いています。また **Bruxelles, Bibliothèque Royal, II 2726** 残された写本を見るとフランシスコ会はポルチウンコラへの行列聖歌を聖霊のイムヌス **Veni Creator** に定めています。これはポルチウンコラの総集會が聖霊降臨祭の日に行われた影響かもしれないと私は推察します。このような修道会の固有事情をもこの目録は反映しています。

また興味深いのは **l'Ordo des Humiliati** とされる聖歌写本が1冊だけ残っていることです。中世の使徒的宗教運動のひとつであり、後に異端とされたフミリアーティの典礼音楽の証拠がミラノの **Biblioteca Trivulziana, 518** に残されているのです。こうしてみると典礼音楽史を仔細に見ていくにあたり、この目録は大変有用であるといえます。

B-A-C-H; Fugen der Familie BACH (ME1a/B118/1)

B-A-C-H (シ♭ - ラ - ド - シ) という魅力的なモチーフに基づくオルガン曲は数多くあり、その目録さえあるくらいなのですが、これはバッハ家の人たちが自ら作った **BACH** によるフーガ曲集であり、**BACH** による **Bach** たちの作品集ということになります。セバスチャン・バッハを筆頭に、息子のエマヌエル、クリストフ、クリスチャンが続きます。

杉本ゆり記